

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 平 典子

副査 竹生 礼子

副査 花渕 馨也

副査 本田 彰子



このたび 高橋 奈美 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 ALS患者の病気の発症と進行が家族の生活にもたらす影響

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

本研究は、筋委縮性側索硬化症（ALS）患者の家族に焦点を当て、ALSの発症と進行が家族の生活にもたらす影響を明らかにしたものである。研究の特徴は、ALS患者の家族を患者のケアギバーとしてではなくケアを必要とする対象として位置づけ影響を明らかにした点、ALSが進行性神経難病であることをふまえ、発症、診断、進行、終末期および死別後まで長期的な観点から、家族成員におよぶ広範かつ多様な影響の具体相について、記述的方法により詳細に明らかにした点にある。申請者は、症状の現れや進行が不確かであり、侵襲的人工呼吸法（TPPV）の選択など患者の生死に関わる深刻な状況におかれるというALS特有の療養状況において、介護活動以外の領域で家族が経験する様々な影響についてこれまで明らかにされて来なかったことに問題意識をもち研究に取り組んだ。研究結果は、家族看護の中で十分解明されてこなかった領域に新たな知見を示すものであり、研究としての新規性が認められた。

研究方法では、Braun and Clarkが提唱するテーマ分析による質的記述的研究法が採用された。分析は、事例ごとに一人ひとりのインタビューデータに含まれる意味について、患者の病状、介護年数や介護の方法など背景を捉えながら緻密に進められた。結果、10事例に関して83テーマが生成され、これらは事例ごとの特徴が反映された内容であった。また、10事例の比較検討から家族に共通する影響として6つの共通テーマが抽出され、家族ケアの在り方を含め考察が展開された。

審査では、テーマと共通テーマの抽出方法や整理の仕方に一部曖昧さがある点、ALS診療ガイドライン策定後の変化など歴史性を踏まえていない点、看護への示唆をより実践的なものとすべき点など、一部追加修正の必要性が指摘された。しかし、濃密なインタビューデータに基づき、具体的文脈の中で家族への影響を明らかにしようとする綿密な分析は、背景も含め事例の特徴がよく捉えられており、家族が受ける影響の多様で複雑な様相が浮き彫りになっていると高く評価された。

4 最終試験の要旨

審査は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価および審議によって行われた。プレゼンテーションは明確に内容が伝わるものであり、審査委員からの質疑に対する応答は適切かつ明快であった。

審査の結果、本学位論文は新規性と独創性を有し、ALS患者の家族に対する看護に貢献する価値あるものとして全審査委員が認めた。

以上の結果 高橋 奈美は、
博士（看護学）
の学位を授与する資格がある
と判定する。